

5-3 『ドイツ・イデオロギー』執筆の意義

ドイツイデオロギーへの批判と以前の哲学的良心の精算。

「……だが、これはその当時にはまだ哲学的な用語で行われたので、そこに伝統的にまぎれこんでいる「人間の本質」、「類」等々の哲学的な表現が、ドイツの理論家たちに、現実的な展開を誤解して、ここでもまた問題はただ彼らの着古した理論の上着を新しく裏返しすることだと信じるのに好都合なきっかけを与えたのであった。」*その当時＝『独仏年誌』に『ヘーゲル法哲学批判序説』、『ユダヤ人問題によせて』を書いた当時。（……は青山の省略）④-[21]P109上6～11（マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』）

「フリードリッヒ・エンゲルスと私は、経済的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説が（『独仏年誌』に）現れて以来、たえず手紙で意見をとりかわしつづけてきたが、彼は別の道筋を経て（彼の『イギリスにおける労働者階級の状態』を参照）、私と同じ結果に達していた。そして、1845年の春、彼もまたブリュッセルに腰をおちつけたときに、われわれは、ドイツ哲学のイデオロギー的見解にたいするわれわれの見解の対立を共同してつくりあげること、事実上はわれわれの以前の哲学的な良心を精算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の批判というかたちで実行された。部厚い八つ折判2冊の原稿がヴェストファーレンにある出版所に届いてからかなりあとになって、われわれは、事情が変わったので出版できないという知らせを受けとった。われわれはすでに自分のために問題を解明するというおもな目的を達していたので、それだけに快く、鼠どもに、原稿をかじって批判するままだにさせた。……」④-[30]全文P133～135（マルクス『経済学批判』（序言））